

年輪年代法最前線

年輪年代法とは、樹木の年輪の幅が各年の気候（おもに気温）に対応して変化することを利用した自然科学的年代測定法の一つで、誤差のない年代が得られます。わが国では、ヒノキやスギの年輪を使って、今から約3000年前までの年代を割り出す際に基準となる暦年標準パターンができています。

古環境研究室では、歴史学の年代研究に資するため考古学、建築史、美術史などに関連した木質文化財について、この年輪年代法による年代測定をおこなっています。また、全国各地で発見される埋没樹幹の年代測定を実施し、自然災害の発生年を確定する研究もおこなっています。

現在、奈良市にある唐招提寺では国宝の金堂（奈良時代）の全面解体修理事業が進行中です。当研究室では、これを絶好の機会ととらえ、建築部材の徹底した年代測定をおこなう考えです。この調査によって、金堂建築の創建年代や改修年代を知るための重要な年代情報が得られるものと関係者から大いに期待されています。

昨年度に実施した研究の成果の1つとしては、金堂

隅鬼の年輪年代が確定したことが挙げられます。この彫刻は、四隅の軒先の尾垂木と隅木のあいだにあって、高さは約30cm 前後と小振りながら、何ともいかめしい表情で鎮座しているものです。材質は4体のうち3体がヒノキ、1体がマツでした。ヒノキ材の3体について年代測定をおこなったところ、それぞれ636年（東南隅）、569年（東北隅）、504年（西北隅）と確定することができました。3体とも心材に続く辺材部が完全に失われたものばかりでしたので、原木の外周部をどの程度切削したかは不明ですが、奈良時代の創建当初のものとして間違いのないと考えています。これらの隅鬼は、わが国最古のものと判明しました。今後どんな発見がでてくるか、それが楽しみです。（埋蔵文化財センター 光谷拓実）



わが国最古のものと判明した隅鬼4体（唐招提寺金堂）

井上さん日本写真学会東陽賞受賞

飛鳥藤原宮跡発掘調査部で発掘現場や遺物の写真撮影を担当している井上直夫さん（専門職員）が、日本写真学会より東陽賞を授与されました。この賞は、日本で最初に写真工業社を興した菊池東陽氏にちなみ、写真技術の応用・普及、写真教育などに顕著な貢献をした学会員に対して毎年一人に贈られているものです。受賞理由は、埋蔵文化財の写真撮影と保存に関する技術開発に長年努めてきたこと、および『埋



キトラ古墳壁画撮影に臨む井上さん（右）

文写真研究』などの著作や講演を通じて埋蔵文化財撮影の教育普及活動に大きく貢献したことです。なかでも家庭用のデジタルカメラに小型蛍光灯と手作りの特製カメラスタンドを組み合わせ、キトラ古墳石槨内の壁画撮影に成功したことは、記憶に新しいところです。手近で安価な材料を用いて撮影時の様々な障害を克服していくのが井上さんの技術開発の真骨頂で、その創意と工夫には定評があります。また、教育普及の面では、埋蔵文化財センターの文化財写真課程研修・報告書作成課程研修の講師を務め、井上流を全国に広めてきました。

日本写真学会賞授賞式は、中央大学で5月22日に開催されました。井上さんは「文化財写真の現状」と題して記念講演をおこない、埋蔵文化財写真に対する日本の公的機関の認識の低さや予算と人員の少なさ、文化財記録をデジタルデータでなく銀塩写真画像で残すことの意義と重要性を訴え、大きな反響を呼びました。今回の受賞を契機に、文化財写真に対する評価と理解が深まることを願ってやみません。

（飛鳥藤原宮跡発掘調査部 竹内 亮）